

BOOKS

●この本

『アジア文化圏の時代』

レオン・ヴァンデルメール著 福鎌忠恕訳

活力の源泉としての儒教文化

アジアNICS、ニュー・アジアなどと呼ばれて、この

ところ東アジア経済圏の活力が大きく注目されている。そうしたなかで、日本はその中核になるのだが、日本は近代化に成功したアジアの例外的存在だといった見方は、もう

Leon Vandermeersch
1928年、フランスに生まれる。81、84年、日仏会館フランス学長。現在、パリ大学V高等研究所委員長。原題は「Le nouveau Monde sinise」
■大修館書店 ■一八〇〇円



完全に過去のものになってしまった。

本書は、そのようなアジア地域の将来の成長を展望しつつ、そこに共通する同一性(アイデンティティ)を経済、政治、文化の三つの面から抽出して、その全体を「新しいシナの世界」(Le nouveau Monde sinise)、つまり新しい漢字文化圏ないしは新しい儒教文化圏として描こうという、野心的にして斬新な試みである。

だが著者は、旧文化としての儒教文化を復古趣味で取り上げようとするのではなく、また儒教的な旧イデオロギーへの回帰を時代錯誤的に叫ぶのではない。

「正にまた儒教が決定的に死んでいればこそ、その遺産が発展の諸要請と矛盾せず、新しい思维様式の中に再投資されることができるのである」

との著者の指摘はきわめて重要であり、そうであるがゆえにこそ、著者の言う「儒教のルネッサンス」が可能なのだと言えよう。

こうして著者は、東アジア経済圏の活力の源泉としての儒教文化に着目するのだが、それは、アジアの漢字文化諸社会を構成した共通項こそ、儒教であるからにはかならない。

そして著者は、
「儒教の真髄は何に存して

いるのか? 三語をもって答える。すなわち、家族(famille)、儀礼(礼)rite、高級官僚制度(mandarinat)である」

とみごとに抽出して、
「儒教的共同体主義の著しい特徴の一つは、宗教的信仰に全く煩わされていないことである」

と語り、これらの要因がアジア社会の発展にどう結びついているかを解き明かそうとしている。

例えば、「近代化の媒介物、正に漢字はそれであった」とする著者は、
「漢字文化諸国における世帯の貯蓄率は、世界で最高の水準に達している。……東アジア社会のこの貯蓄への大きな性向の中には、質素、節制、用心という何百年の伝統が容易に再発見されるが、これらの伝統こそ『儒教』は常に経

済面における主要な美德としてきた」
と語っている。
著者は、伝統あるフランス中国学(Jasintologie)の成果を継承しつつも、アジア社会の現実を丹念に分析することによって、「新しい文明形態」としての「儒教文化圏」に新たな光を当てることに成功している。

最近注目されている「儒教文化圏」についての理解を深めるうえで欠かせない有益な書であり、金日坤著「儒教文化圏の秩序と経済」(名古屋出版会)、W・T・ドバリー著「朱子学と自由の伝統」(平凡社)と併読されればなおよいであろう。

なお、シンガポールに関する邦訳一七六頁の「南陽大学」は「南洋大学」の誤りである。

東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

62. 9. 26 週刊東洋経済